

## 主のご用につながる神のご計画

狛江教会 吉川 進

私は狛江教会の壮年会の一員で、東京神学大学の大学院2年に在籍しています。63歳まで公務員として働いたのち、神学校に進み、教会の牧師として主のご用にお応えしたいと学んでおります。西東京教区の壮年会の方々に向けて、小さき者の証しを書かせていただきます。

私は1948年に長崎県の佐世保で生まれ、両親が受洗するとき、姉、弟と3人で幼児洗礼を授けられました。宮崎から共通の祖父母を介護に来ていた従姉Mが、私の両親を教会に誘ったのが、我が家の信仰のルーツです。

造船所の設計技師だった父は、日曜日にも自宅で設計図を引く忙しさにあり、母が、礼拝生活を忠実に守る人でした。教会は、町外れの造船所近くの家からは遠く、CSには自分でバスに乗れるようになった四年生から通い始めました。クリスマス前になると、放課後、教会に集まって生誕劇の練習をしたのが楽しい思い出です。中学生になって礼拝で聴く牧師の説教がユーモアたっぷり、大人に仲間入りした気分でした。

63年に、父の転勤により、一家で川崎に転居し、4年後に狛江市に移るまで皆、礼拝に参加する教会が定まらず、私にとっては牧師から大人の信仰への移行を説かれる機会が失われました。狛江に転居後の夏、私が弟と散歩中に、狛江教会の案内板を見かけて先代の礼拝堂に気づき、両親に狛江教会を「薦め」ましたが、私はしばらく教会を外から見る、と生意気に宣言しました。

私は、商船大学卒業後、航海訓練所の練習船の機関科教官としてほぼ一年中海の上で過ごしました。航海に出かけるときにいつも母が祈って送り出してくれました。私が教会を離れていた間、まさに教団では同じ世代の若者が暴力的な振る舞いで「改革」を標榜して荒らした時期であったことを後に知りました。

休暇で帰宅した折には、狛江駅前商店街の角に立てる礼拝案内の看板書きを、母の代わりに私が書いていました。中学校まで続けた書道が役に立ちました。社会人の5年目、家庭集会で祈られ、婚約者の素直な信仰理解に触れる中で、聖餐に与りたいという非常な渇きを覚え、結婚直前に主の十字架の福音を信じることに押し出され、信仰告白をしました。

**神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなくご自身の計画と恵みによるものです。**（第二テモテ一章九節）

出向で茨城県大洗町にある高速増殖実験炉の運転管理に携わった約4年間は、水戸市内の、改革派の歴史のある小さな教会で、教団信仰告白、十戒の唱和を厳格に守る主日礼拝に与りました。子供たちも折り紙をしたり絵を描きながら礼拝堂で共に過ごす温かさがありました。

帆船日本丸の機関長を最後に、93年から海難審判庁での勤めが与えられ、相模原に家族を置いて、約2年毎に転勤しながら、単身生活を始めました。日曜日には居住地の教会に客員としてつながりました。ホーリネスの群れ、バプテスト教会での交わりも、その後の私にとって祈りの生活の基礎となりました。

広島のある教会で、突然無牧になる経験をしました。水曜と土曜の夜は、祈祷会と主日礼拝に備えて役員の一人在牧師館に泊まることになり、彼と親しかった私は、両日夕方、職場から帰宅しておかずを作り、牧師館に持参して彼と夕食を共にしました。神様は、預言者エリヤに肉とパンを届けた鳥（列王上17章）の役目を、約半年の間、私に与えられたのです。こうして守った夜の祈祷会時には、彼に提案して、電車通りに面した玄関の灯りを明るく点灯し、祈祷会の案内表示を照らしました。ある夜、教会前を十年間通っていた女性が、従来と異なる灯りに誘われて祈祷会に導かれました。祈祷会の輪が教会

に拓がるうち、祈りの力が満たされた彼女は、牧師着任後の最初の受洗者となりました。感謝。

私は、これまで2つの教会で、主日礼拝の前にその日の聖書テキストを読む成人科の時間を提案し、み言葉の恵みを広く共有することを感謝しました。一方で、各地の歴史ある教会が、信仰告白による一致の欠如を感じることもあり、また、高齢化も加わり、教勢の低下を強いられている現実を見せられました。教会で信徒としての働きのほかに何か求められていることを感じました。

2010年1月のある日、妻が東京神学大学の公開夜間神学講座の募集記事を私に示してくれました。締め切り直前のところ、大急ぎで牧師に推薦状を書いてもらい、4月から週2回、横浜の職場から銀座教会に通い、先生方の真剣な授業を通して、聖書の啓示の深さ、教会の歴史と伝統の重さに触れました。

そのころ、私は、海難事故調査の方式が裁判形式から、世界標準方式に統合されたことで、却って対話的な真実発掘の力が削がれるのを感じ、定年前の最後の数年を捧げる思いに疑問が膨らんでいました。

公開夜間神学講座で、み言葉のはたらきに感動しながら、職業人生活における仕上げに迷うままで良いのか？との内側からの問いに、それまで意味を見出せなかった次のみ言葉の中に、牧会への献身の思いが与えられました。

**シモンと兄弟アンデレ…彼らは漁師だった。イエスは、「私について来なさい。人間をとる漁師にしよう。」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。**（マルコ一章一六～一八節）

東京神学大学には、大卒は学部3年に編入されますが、神学基礎の部分の単位取得が多く求められ、怒涛の3年次授業となります。特に必須科目のギリシャ語は、個人差がありますが苦しい授業の一つです。私の学びは、知力の低下と戦いながらのものです。が、気力と体力でしのぎながら、主が成してくださっていることに支えられています。そして、私にとって、中年から若者まで同級生たちの信仰のベクトルが実に明確であることが誇りであり、宝です。

上記のように教会を離れていた時期は、神さまのご計画でつまらぬ信仰的躓きをしないで済んだのだ、と自分では思っています。また、45歳からの単身赴任は、各地での教会の交わりを通して、信仰的な養いを与えられました。いずれも神さまのご計画であったと思わされます。

神学の学びは恵みに満ちており、み言葉の伝える業も、神さまが語ってくださるから心配はありません。私が、これから補教師試験を受けて合格すれば、2年の牧会経歴で正教師の試験を受けられることになります。何歳まで牧会できるか分かりませんが、主のご用のためには、神さまが支えてくださると信じています。西東京教区の壮年の皆さまにも、健康に恵まれ、主にお委ねする思いに富む方にはぜひ伝道者の業への挑戦をしていただきたく思います。日本中の教会が、み言葉の役者を熱望しています。